令和４年度　第１回地域福祉活動計画策定・推進評価委員会　会議録

日　時：令和４年６月23日（木）18：30～20：00
会　場：練馬区立区民・産業プラザ　　Coconeri3階　ホール(西・中央)
※オンライン同時開催

１．事務局長挨拶

お忙しい中お集まりいただき感謝申し上げる。今回は中間評価がメインとなっていく。お配りする資料が多く、タイトなスケジュールで進めていくことになる。簡潔に説明していく予定だが、一方で委員のみなさまには活発な意見をいただき、議論していきたい。よろしく願う。

２．配布資料確認

３．練馬区地域福祉計画進捗状況報告【資料：練馬区地域福祉計画概要版】

委　　員：練馬区の地域福祉計画の進捗について説明する。地域福祉活動計画と連携を図りながら、両輪として練馬らしい地域福祉を進めていく。本日は地域福祉計画の中でも社協との関係が深い項目の進捗を伝えたい。施策１「区民との協働と地域の支え合いを推進する」については、地域福祉コーディネーター、ネリーズ、キーパーソンとともに活動を進めていただいた。ネリーズについては昨年度までの登録者が 684 名になった。社協にはコロナ禍の状況を踏まえ、オンラインを活用するなど感染対策を講じたうえで、地域づくり活動に取り組んでいただいた。続いては 5 ページの施策２「福祉サービスを利用しやすい環境を作る」について話したい。こちらも概要版には取り組みが記載されていないが、生活困窮世帯の自立支援という取り組みになっている。その中で生活相談コールセンターということで、生活相談や特例貸付、住居確保給付金の案内などコロナ禍での相談に対応していただいている。それから、生活サポートセンターでは、自立相談支援事業や家計改善支援事業など生活困窮者に対する事業を着実に実施していただいている。また、取り組み項目３「災害時の要支援者対策の推進」には、災害ボランティアセンターの運営を社協と協力して行っていく旨が記載されている。昨年度は、「災害ボランティアセンター立ち上げ訓練」や「災害ボランティアコーディネーター入門講座」、「災害シンポジウム」などの開催に取り組んでいただいた。続いて８ページ施策５「権利擁護が必要な方への支援体制を整備する」ということで、主に権利擁護センターの取り組みとなっている。権利擁護センターは成年後見制度を推進する中核機関と位置付けられて、身近な地域で関係者が連携できるよう、ネットワークを構築していただいている。具体的には、検討支援会議を昨年 12 回開催し、顔の見える関係づくりを推進した。また、法人後見や地域福祉権利擁護事業などにも取り組んでいただいている。国では、「第 2 期成年後見制度利用促進基本計画を策定し、地域共生社会の実現に向けて権利擁護支援を推進する」としている。この考えを基本として、引き続き創意工夫しながらともに取り組んでいきたい。以上が社協に関連する項目の説明になる。令和 3 年度の全体の進捗としては「ほとんどの項目で計画通りに進んでいる」と言える。7 ページ施策４「多様な人の社会権利、社会参加に対する理解を促進する」については、イベントや人が集まる内容のものが多かったこともあり、コロナの影響で進捗が遅れている。全般的には、地域福祉計画は順調に計画通りに事業が進捗しているという状況である。

委　　員：令和２年度に策定後、他の計画の策定やコロナの影響など状況変化があったと思うが、地域福祉計画の方では中間評価を踏まえて何か取り組みを加えるなど変更されているか。または、計画は計画として状況変化をこう受け止めている、など何か決まっていることがあれば知りたい。

委　　員：地域福祉計画としては令和２年度から令和６年度まで実施期間を定めて運用している。計画全般としては今後５年間で進めていく。各項目としては、やはりコロナの影響や様々な社会情勢の変化なども踏まえつつ、それぞれ事業も変化させながら運用していく形となる。

委　　員：概要版ではない計画の冊子の方には社協の活動の関わりについてしっかりと明記されているか。

職　　員：概要版ではない計画の冊子の方にはしっかりと明記されている。本日は概要版を持参していたため、今後は配布する資料にも配慮していきたい。

４．第５次地域福祉活動計画の取り組み状況について

①第５次地域福祉活動計画　推進評価チームの取り組み【資料１・2】

●ネリーズ通信

職　　員：委員と職員３人でスタートしている。兼任でもやってみたい、と希望いただける委員がいればお声がけいただきたい。取り組み方針に変更はなし。年４回発行を予定。多様な人が紙面作りに主体的に関わってもらえるよう、拠点での関わりも活かしていく。出来上がったばかりのネリーズ通信23 号を配布させていただいた。ネリーズのみなさんには、懇談会のチラシも同時に送付するため、来週のお届けになる。

●懇談会

職　　員：ここ２年間、コロナの影響からオンラインでの開催となっていた。参加のしやすさなど、オンラインならではの良さももちろんあるが、実際に顔を合わせてやり取りする対面での実施の重要性も再確認できた。今年度は、コロナの状況もあるが可能な限り対面での実施を進めていく予定。内容としては取り組み方針にもあるように「多様性を知ってネリーズマインドを広げながら人と人のつながりを築いていく」ということを意識して、地域の活動団体の拠点や会場を活用して開催していきたい。団体の活動を知る、学ぶような要素も交えながら、様々な価値観を持った人たちに集まってもらう中で、次の活動につながるきっかけにもなっていくと良いと考えている。また、時期を見て､各懇談会に参加したネリーズ同士が感じたことを語り合える場を作っていきたいと思っている。今後の予定としては、今年度の第１回懇談会として「つくりっこの家」を会場に実施する準備を進めている。令和４年７月 27 日(水)14:00～16:00 で実施予定。内容については「つくりっこの家」の活動の紹介、その後懇談の流れで考えている。

●ホームページ

職　　員：地域福祉活動計画について親しみやすい情報発信の方法としてアニメーション動画の作成やホームページ、フェイスブックへの動画投稿の準備などを進めている。動画の作成にあたってはネリーズや地域住民の参加などについても意見が上がっており、今後さらに具体的に展開していきたい。また、広報委員会とも連携を図りながら、地域福祉活動計画をより広く周知していく方法を検討している。喫緊の状況としては、アニメーション動画をホームページ上でより見やすくする工夫として、ユーチューブの運用を開始した。今月上旬に実施したチームの打ち合わせでは、委員から､「地域福祉活動計画は情報が多いこと、社協を知るきっかけ作りとなると良いこと、そのためには内容を複雑にせずにシンプルな内容で作成すると良いのではないか｣などのアドバイスをもらっている。動画については、より短時間の内容が好まれ、視聴する端末もパソコンからスマホなどの小型端末へと変わってきている。動画の適用範囲は今後も広がっていくことが想定される。様々な情報発信の方法を活用し、練馬区社協の取り組みについて、住民の皆さんに興味を持っていただけるような工夫を今年度も引き続き考えていきたい。

●キーパーソン事例

職　　員：事例の取り集めや見える化に取り組んでいく。令和３年度は地域福祉コーディネーター、ネリーズ、キーパーソン、それぞれの機能についてグループインタビューを行い、三位一体で地域福祉の推進の動機を高めていることを検証した。今年度は事例をさらに積み重ね、分析を進めていきたい。また、多くの人が事例を通し、3 つの機能を理解できるよう、事例の見える化の方法についても検討していきたい。2 月の策定委員会で事例を集めて分析していくこととさらに多くの人に事例を伝えていくための見える化が必要との意見をいただいた。事例の見える化の一つの方法として資料 2-2、2-3 の「4 コマのイラスト」を準備した。これまでにお伝えしてきた「琴の事例」と「水の事例」で試行している。イラストは、自分で描いてみようと思っていたがうまくいかず、小５の息子が描いてくれたものになる。事例の分かりやすさと、読んだ人から共感を得やすい形になっているかを意識して作成した。（資料 2-2「事例①思いに突き動かされる」資料 2-3「事例②視点を変える」を説明）以上の２つの事例が、資料 2-1 の「キーパーソン・ネリーズ・地域福祉コーディネーターの関係図」に当てはめると、事例①はキーパーソンの丸の中の「突き動かされる」のあたりに、事例②は地域福祉コーディネーターの「分析」のあたりにくるのではないか。もしくは、事例②については、みんなのための活動をしているＢさんがすでにネリーズなのではないか、と捉えるとネリーズと地域福祉コーディネーターの丸が重なる部分に入るのではないか、とも考えられる。自由な解釈もできる余地を残しながら、見える化の方法として提案したい。かるた作りの時と同様に大泉桜高校、なゆたふらっと、白百合福祉作業所、かたくり福祉作業所など、絵で表現することが好きな方に協力いただく形で進められるのではないか。また、かるたのエピソードも事例としてイラストにしていけると良いと考えている。イラストについての、感想や意見をいただきたい。

委 員 長：何か確認や質問はいかがか。

委　　員：懇談会のテーマについて。ネリーズが地域の課題などを出す形でテーマを決めていくのか、事務局で提示していくのか。今後の懇談会のテーマ出しの基本的な方向性について確認したい。

職　　員：基本的には、懇談会を実施したうえで、参加したネリーズから上がった「こんなことを知りたい」「あそこはどういった場所か」といった疑問をもとに進めていけると良いのではないかと考えている。また、委員、職員からも積極的にテーマのアイデア出しをしながら話し合っていけると良いと考えている。

②第５次地域福祉活動計画の中間評価と今後に向けて【資料 3～6】

●評価

職　　員：「第５次地域福祉活動計画の中間評価と今後に向けて」について説明する。資料は３・４・５・６の４種類になる。資料４「中間評価参考資料」は、資料５の「取り組み表」、資料６「委員会の事業成果」と、ネリーズ懇談会や地域住民向け講座、法人ネットなどの実施事業のアンケート、取り組み報告書、策定委員のご意見等をもとに、根拠資料としてまとめたものになっている。参考にご覧いただきたい。

資料３「第５次地域福祉活動計画の中間評価と今後に向けて」から説明させていただく。令和２年度から令和６年度までの５か年計画である第５次地域福祉活動計画は、３年目を迎えた。第４次計画にて残された課題は、

① ネリーズをはじめとした地域の「気づき」の共有を広く発信していくこと
② 地域で身近に自発的に活動を行っている「キーパーソン」とのつながりを強化していくこと
③ 「ネリーズ」や「社会福祉法人等のネット」等を活かし、地域住民や分野を超えた専門機関との連携を深め、協働による練馬らしい地域づくりをすすめていくこと

という３点が挙げられていた。これらは第５次計画の「（柱１の）つながり支えあう地域をつくる」

の取り組みとして掲げ、策定・推進評価委員とともに戦略チームを立ち上げて推進してきた。また、第５次計画では、多様で複雑な生活課題に向き合い、まるごと支えあう仕組みの構築と権利擁護の視点を持った地域生活支援に取り組んでいくことを、「（柱２の）それぞれの生き方を支えあう」として掲げた。

令和２年度の始まりとともに、第５次計画策定時には想定できなかった新型コロナウイルス感染症の拡大という状況で、地域福祉活動を停滞せず推進できる方法を模索してきた。コロナ禍で見えてきた新たな課題等も踏まえ、この中間評価で計画推進について確認し、後半の推進につなげていきたい。

「1.第５次地域福祉活動計画前半の取り組みと中間評価 1」では、「戦略チームでの取り組み」「（資料５の）第５次地域福祉活動計画の取り組み表」「新型コロナウイルス感染症の影響がもたらした地域課題」の３つの項目について２年間で実施した内容をまとめ、分析・評価した。

「戦略チームでの取り組み」は、一番右の中間評価に記載したように、策定委員とともに４つの戦略チームを中心に計画推進に取り組むことで、アイデアと視点が広がり、様々な場づくりや見える化に取り組み、発信力が高まった。一方で発信したものをさらに住民に行き届かせるため、情報が届かない人へ届ける工夫が必要であることも課題として見えてきた。そのためには、住民にどうわかりやすく伝えるか、住民と一緒に見える化、アナログでも伝える工夫等が必要であることを課題と捉えた。

資料裏面、「第５次地域福祉活動計画の取り組み表」では、２つの柱のもと各社協拠点や部署で地域住民や地域組織・団体などとコロナ禍でもつながる場をつくり、住民の地域活動を支えた。一つの相談から課題を捉えてネットワークで共有し理解し合う環境づくりに取り組んだ。今後はさらに地域の課題を捉えネットワークを活かして支えあう仕組みを構築していく必要があると分析した。

「新型コロナウイルス感染症の影響がもたらした地域課題」では、コロナに対する不安や恐怖などの負の感情や停滞しがちだった地域活動のフォローも含め、コロナ禍で顕在化した課題に社協としてどう向き合い具体的に対応していくかを、後半に向けて検討していく必要があると考えた。

これらの中間評価を踏まえて、「2. 第５次地域福祉活動計画中間評価まとめ」とした。第５次計画では、第４次計画で推進してきた地域福祉コーディネーターとネリーズによる小地域福祉活動の推進に、地域住民であるキーパーソンの概念を提案し、三者が協働した地域づくりを計画の中心に置き、推進を開始した。

キーパーソンチームでは、キーパーソンとは何かを事例を通して話し合いを重ねて、「人」ではなく「機能・役割」という捉え方に変化してきた。そのなかで人を突き動かす力は、人・物・環境・課題等もあるのではないかということが見えてきた。グループインタビューとディスカッションの取り組みでは、「地域福祉コーディネーター」「ネリーズ」「キーパーソン」の三位一体による地域福祉推進について話し、考え、お互いの思いを共有するプロセスが、委員と職員の意識の変化、地域福祉推進の動機を高める結果をもたらしていることが確認できた。「ネリーズ」「キーパーソン」「地域福祉コーディネーター」の三者について、役割や機能をディスカッションしていき、図にも示したように、三者は単体で役割や機能を果たすのではなく、重なりあいながら機能し地域福祉活動を推進していくものであることと、また三者がつながることで共感や広がりにつながっていることが分かった。このことから三者がともに地域福祉活動を進めていくという第５次計画の方向性は良かったと考えた。

第５次計画のこの２年では、第４次計画の「気づきの視点」「育ちあいの視点」を継承しつつ、第４次計画において残された、冒頭でお示しした課題を踏まえて取り組んできた。第４次計画で残された課題に対して、

①の地域の気づきの共有の発信としては、策定・推進評価委員とともに戦略チームを組んで取り組みを進めることでアイデアと視点が広がり、新しい試みにチャレンジし、ネリーズの「気づき」の共有と発信力をより高めることができた。

②のキーパーソンについては、「地域福祉コーディネーター」「ネリーズ」「キーパーソン」の三

位一体による地域福祉推進の方向性を継続しつつ、事例を用いながらその役割や機能について考えや思いを共有する取り組みのプロセスを社協各部署で継続していくことで職員一人ひとりの意識と動機の高まりを広げていくこと、また、地域活動団体や地域住民に向けて「気づきを広げる場と機会」を継続的に設けていくことが地域福祉推進の原動力につながっていると確認することができた。

③の「ネリーズ」や「社会福祉法人等ネット」等を活かし、地域住民や分野を超えた専門機関との連携を深め、協働による練馬らしい地域づくりをすすめていくことについては、「ねりま社会福祉法人等のネット」において、外国籍の人や障害のある人などから寄せられた相談を就労体験の取り組みにつなげるなど、福祉の専門職集団である社会福祉法人だからこそのネットワークで支援につなげた。地域福祉コーディネーターは、地域の課題を捉え、地域住民や分野を超えたネットワークで共有し、地域に向けて発信しながら理解を深める実践例を積み上げている。

「3．第５次地域福祉活動計画の後半に向けて」に移る。新型コロナウイルス感染症の感染拡大前の社会にすぐに戻ることは難しいなか、計画推進３年目である今年度以降も、目的に応じオンラインを有効的に活用する一方で、対面で集う場だからこそ伝わる温度感を大切にしながら、感染対策と社会活動の二面性を同時に動かしていく。

戦略チームによる取り組みは、発信力を高めることにとどまらず、ネリーズをはじめとした地域住民の主体的な発信をどう増やしていくか、また情報を受け取る人をさらに増やしながら気づき連鎖（育ちあい）をどのような手段で広げていくかの工夫を検討していく。

「つながり支えあう地域をつくる」取り組みは、地域の子どもたちへの食、学習等の支援を継続していくとともに、発達性読み書き障害の子どもを持つ親からの相談から始まった取り組みのように、住民とともに課題を共有し地域に発信しながら解決していく地域づくりを進めていく。この後、「発達性読み書き障害の相談から始まった取り組み」については詳しく紹介する。

また、保健福祉分野に加え、保護司・弁護士・司法関係や団体等関係機関との分野を超えたネットワークの構築をさらに進め、必要な福祉サービスや社会資源に結びついていないことにより法に触れるおそれのある人たちへのネットワークを通した課題解決の仕組みづくりにも取り組んでいく。

「それぞれの生き方を支えあう」取り組みは、個別性と多様性を尊重した権利擁護の視点を基盤とし、既存の制度や福祉サービスでは解決できない生活課題を関係機関や地域を巻き込み、どんな視点で投げかけ、どんなプロセスを踏んで進めたのか等、事例を整理し、社協らしい取り組みの見える化に取り組む。

計画策定時には想定できなかった新型コロナウイルス感染拡大は、安全・安心な生活に危機感を抱き、生活の困難さを我が事として実感する機会となった。生きづらさを共感できる社会になり、地域で支えあうことの大切さを人々が実感する機会にもなった。

第５次地域福祉活動計画後半は、今までのまとめ・評価・分析を踏まえ、相談から見える生活課題や生活の困難さ、社会課題を地域に向けて発信するとともに、ネリーズをはじめとした地域住民や地域活動団体、関係機関との協働による予防・解決の仕組みづくりにつなげていきたいと考えている。

委 員 長：評価チームの委員からいかがか。

委　　員：評価として捉える範囲が多岐にわたるため、どこに焦点を絞っていくべきか難しい。発達性読み書き障害の取り組みなどは大きな成果。何をどのように評価していくか、もう少し具体化していけると良いと感じている。

③ 地域福祉コーディネーターの取り組み【資料７】

職　　員：策定委員のみなさんには 6/17 に開催した「発達性読み書き障害の理解を深めるシンポジウム」のご案内をメールにてさせていただいた。シンポジウムを開催するに至った経緯等をみなさんとも共

有させていただきたいと考えている。そもそもは、発達性読み書き障害のお子さんを持つお母さんからボランティアセンターに「教科書にルビを振ってくれるボランティアはいないか」と相談が入ったことがきっかけ。そういった個別の相談から地域の課題へと展開していく中で、シンポジウムの開催へと至っている。シンポジウム開催までのプロセスや、地域福祉コーディネーターの動きなどについてはジェイコムの取材も受けている。ジェイコムの映像も見ていただき、対応した職員からもコメントを補足していきたい。

＜＜「ジェイコムチャンネル　つながるＮＥＷＳ」放映映像視聴＞＞

職　　員：映像の補足と、またシンポジウム当日の様子なども伝えさせていただく。

委 員 長：当日も取材は来たのか。

職　　員：来ていたが、主に講師に対しての取材であった。こちらがバタバタしていた影響もあったのかもしれないが、社協としては取材を受けてはいない。映像で見ていただいた通りだが、行間の補足というか、取材の場ではお話していない部分についてもお伝えしていきたい。相談があった当時、自分たちが発達性読み書き障害を知らなかった。「学ぶことが必要」が率直に感じたところだった。そのため、当事者の方をお招きして勉強する場を持った。勉強の場に、発達性読み書き障害かもしれないと悩んでいる家族の方も何名か参加されており、会の後も話が尽きない様子だった。「こういった場所が必要だ」との声も受け、定期的に家族同士が情報交換を行える場所であり、みんなで発達性読み書き障害について考えていける場として「えるでぃ」を設置し、月１回開催した。保護者の方の参加が中心だが、学校での配慮についての話や、より配慮を求めていきたい、環境が整うと良い、といった話題が多かった。学校での状況が即座に変わることはないという現実を受け、働きかけるターゲットを学校だけに絞るのではなく、地域のいろいろな人がこの障害のことを知ると何か環境が変わっていくのではないか、と考えた。別口で練馬中央ロータリークラブから「地域課題のために何か貢献できないか」という相談を受けていたが、ボランティアセンターに寄せられていたたくさんの困りごとをお伝えする中で、この発達性読み書き障害に関心を持ってくださり、一緒に啓発活動に取り組むこととなった。「知る」ための手段としてどんなものが良いのかと考え、ひとつは啓発冊子の作成、もうひとつはシンポジウムの開催となった。冊子については、「編集委員」の記載もあるが、本当にいろいろな立場の人の協力を得て出来上がっている。「地域の応援団」というページもあるが、発達性読み書き障害の専門機関というのは探せば探すほど無いという現実に突き当たった。関係機関とのやり取りでは、発達障害や学習障害ということであれば相談を受けている機関はあるが、発達性読み書き障害については何か答えを求められたときにどうしていいか分からない、という声も聞かれた。専門機関では無いといった意味ではボランティアセンターも同様であること、そうは言っても目の前で困っているお子さんがいることは事実である。そこを何とかしたい気持ちは同じであること、寄り添ってどうしていくのか一緒に考えられるような仲間を作りたいことを何度か話し合う機会に繰り返し伝え、学校教育支援センターや発達支援センターにも理解を得て記載することができている。この発達性読み書き障害早分かりガイドは、練馬区内の小中学校、各クラス１冊ずつ配布することができている。ただ配布する形とならないよう、事前に小中学校の校長会にお邪魔をさせていただき、経緯について説明をさせていただいた。社協のホームページからもＰＤＦにてダウンロードが可能となっている。シンポジウム当日は参加者の方それぞれの話が胸を打つような内容であった。会場 201 名、ユーチューブ 303 名、合わせて 504 名の方が参加された。それだけ多くの方が、登壇者５名の方の話を聞いて何かを感じ取ってくださっていたのではないかと考えている。今後、それぞれの地域で何ができるのか考え、大きな動きにつながっていくのではないか、と感じている。今回の参加者としては、やはり保護者の方が多かったように思う。登壇した当事者家族の方のお話を聞いて、自分の地域で同じように仲間を作っていきたい、と勇気を得たのではないか。これだけのシンポジウムの開催でさまざまな人との出会いもあったため「今後

何をしていくのか」を問われていると感じている。今回は発達性読み書き障害であったが、それに限らずさまざまなことでお困りの方が地域にはいると思っている。それが例えたった一人の声でも、今回のように形にしていけるのが社協だと思っている。最後になるが、今回のプロジェクトの核は、やはり最初に電話をしてくれた母だと感じている。母に突き動かされたのが、最初に電話を受けた職員であり、その後えるでぃの会を担当する職員がさらに突き動かされる、といった形で、ボランティアセンター内でもお互いに影響しあいながら進んでいった。ロータリークラブの皆さんにも熱意が伝わり、そして聞きに来られた方にも伝わっていったのかと思っている。そんな波のように広がっていく突き動かされる力があるのだと実感できるプロジェクトだった。

委 員 長：たった一人の相談から地域を巻き込み進んでいっていた。とても良いシンポジウムだった。これこそ、ボランティアセンターのやるべきことだな、と感じた。他にも当日参加した委員からも感想をいただきたいが、まずは評価チームの部分で委員からコメントをお願いしたい。順番が逆となって申し訳ない。

委　　員：この順番でのコメントのため、まずはこちらから話したい。職員がインタビューの最後に「この障害の問題だけではなく、いろいろな問題について発信していくことができる」というとても大切なことを伝えていたのではないか。練馬区社協の職員はタレント性の高い職員も多いと思うので、ああいった形も含め、今取り組んでいることをさらに発信していけると良いと感じた。伝えられたことがまず大きく、いろいろな人がつながり、物語の中にたくさんのキーパーソンが登場しているのも良かった。キーパーソン事例チームの示した４コマでもそうだが、「物語になっている」というところに住民は突き動かされていくのではないか。そういった意味でも良い取り組みであったのではないか。

評価については、どのように評価していくか難しい部分が多く、チームで頭を悩ませた。そういった状況の中で、現時点でできる最大の評価になっているのではないか。第４次の計画で残った３つの課題をどのように進めているか、整理してくれている。そこの整理の仕方も戦略チームを作ってきたというところ、社会福祉法人等のネット等の取り組み、柱の２を作った意味も整理をしてくれている。コロナ禍で起こっていることについてもしっかりと触れている。本日飯村委員は欠席だが、チームの打ち合わせで「地域福祉コーディネーター・キーパーソン・ネリーズの三者の図が新たに重なり合ったことに大きな意味がある」と評価されていた。地域福祉コーディネーターとネリーズが登場し、この二者ではなかなか前に進めなくなったときに、まだまだ整理が不十分かもしれないが、キーパーソンという概念が入ることで、地域福祉コーディネーターとネリーズが重なり合って同じ方向で動いていけるという、そういった形の重なり合いかと思う。また、そういった意味では、先ほど職員が話してくれた事例を、キーパーソンやネリーズといった言葉を使いながら、何が起こったかというように整理ができるとこの先いろいろなことをたくさん書けるのではないか。キーパーソン事例チームの示した４コマについても、できれば言葉で「ここでネリーズできたよね。」など記すことで、４ コマ漫画がネリーズなどの取り組みの発展だとわかるような形にしていく必要があるかと思う。また、例えば動画とネリーズ通信を組み合わせるなど、戦略チームの４つを組み合わせて取り組むような形が出てきても良いのではないか。

委 員 長：シンポジウム、本当に良い仕事をしたと心から感心した。キーパーソンチームの事例として、しっかりと積み上げていくべきだと思った。やはり最初に電話をしてきた相談者がキーパーソンであり、相談を受けとめた人がセットになってキーパーソンなのではないかと思う。その後で、社協の中で地域福祉コーディネーターが勉強会を開催したほか、ロータリークラブの申し出をこのようにつなぎ、形として残る形にできたのも素晴らしかったと思う。この障害をあまり知らなかった。学校の先生も知らない人がほとんどではないかと思う。そんな状況の中で、これまでは子どもたちが

勉強してきていたかと思うと、こういった形で丁寧に進めたことで多くの人が救われたのではないか。関わったみなさん、お疲れさまでした。

委　　員：映像をみると、明快で分かりやすかった。ロータリークラブを巻き込めたのもよかった。150 点の出来では。

委　　員：登壇した当事者家族に別で会う機会があったが、読み書き以外でも生きづらさを抱えていたが、社協の関わりでどんどん強くなっていけたのではないか。

委　　員：父がフリースクールをやっている。発達性読み書き障害の方もいるが、発達性読み書き障害以外での様々な障害の人も多い。ひとりひとり子どもたちの背景を聞くと、学校でイジメを受けた、家庭の事情があるなどでフリースクールに来ている。塾だけでは限界がある、と父と話す。行政や家庭、ほかの福祉の様々な分野と連携していかなければいけない、ととても実感させられる。だからこそ、キーパーソンも必要だし、地域福祉コーディネーター、ネリーズも必要。フリースクールでも先生はボランティアで行っている。ひとりひとりのマンパワーでは限界がある。今後しっかり仕組みを作っていかなければいけないと思っている。

委　　員：評価について、ここまで進んできたのだな、と理解できた。発達性読み書き障害のシンポジウムについては、私はオンラインで参加した。登壇者はみな非常に個性的で、同じテーマに違うスタンスで出ていた。あの場を作ることが出来たということがすごく良いことだと思った。500 名以上の参加あったということで、潜在的にこれだけのニーズがあったということだと思う。こういった場を作るうえでのトライアンドエラーも蓄積していくことで、場づくりの経験としていけるのではないか。

職　　員:中間評価としては、今回お出ししたものを承認いただけたということでよろしいか。

＜一同承認＞

５．まとめ

委　　員：これまでは頼りにしていた前委員長がリードしてくださっていたが、第５次からは前委員長の助言もあり、より住民主体で取組むことになっている。委員はこれまで以上に時間を使っていろいろな場に参加するなどしていると思う。地域の人たちがこういった形で入っていくのはとても意味のあることだと思うし、参加した場で職員の取り組みやがんばりを直接目にすることができたのも良かったと感じている。このことは第５次計画の中間評価として、より計画の中身を深め充実させるという視点から評価したい。

６．その他

・活動計画語る会について

委　　員：策定委員会では各チームの報告をしてもらっているが、その過程でのやり取りや雰囲気、課題などについてお互いにシェアできるような語らう場を作りたいと思った。策定委員会で行なっていけると良いとも思うが、コロナの影響で 90 分に時間短縮して開催している現状では難しいかと考え、別日程での実施を提案させていただいた。

７．次回の日程について

以　上